

北アメリカの「危機言語」：現状と課題

著者	渡辺 己
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	139-145
発行年	2003-06-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001913

北アメリカの「危機言語」

現状と課題

渡辺 己

- | | |
|---------------------|-----------|
| 1 はじめに | と言語の紋章的機能 |
| 2 「危機度」について | 5 研究者数の現状 |
| 3 調査・記述の現状 | 6 おわりに |
| 4 言語教育の現状—ある言語の「復活」 | |

1 はじめに

15世紀終わりにクリストファ・コロンブスが「漂着」してからの北アメリカの歴史は、その大陸にすでに文化を築いていたあまたの先住民民族に対する、白人による虐殺、破壊、略奪、そして同化の歴史でもある。300近くあった先住民諸語 (Mithun 1999) は、その話し手を、そしてそれが話される文化的背景を、さまざまな過程のなかで失っていった。

本稿では、北アメリカ先住民諸語のうち、特に、筆者が現地調査をおこなってきた北西海岸に分布するセイリッシュ語族を中心に、その現状と課題を考察していく。セイリッシュ語族はカナダ・アメリカ合衆国間の国境をまたいで分布する23言語からなり、すべていわゆる無文字言語である。(言語名、語族内での系統〔語派〕については別表を参照されたい。以下、語族の言語全体を指す時は「セイリッシュ語」と略す。拙稿の筆者はこの語族のうち、1言語にかんしてのみ現地調査の経験があるが、そこで見聞きしてきたことは、セイリッシュ語族全体のみならず、少なくともこの地域の言語にかんしては共通する点が多いと思われる。

2 「危機度」について

北アメリカ先住民諸語のほとんどがそうであるように、セイリッシュ語族の言語は、すでに死語になっていないどの言語も話者数が少なく、すべて消滅の危機に瀕している言語だと言わざるをえない。さらに言えば、セイリッシュ語はどれもその「危機度」が高い言語だと言わざるをえない。それぞれの話者数にかんしては別表を参照されたい。表にはあげていないが、死語として表記されていない言語のなかでも、その言語内の方

言によっては死語となっているものも少なくない。

ただし、言語の危機度を考えるときに注意しなければならないのは、その話者の単純な数ではない。むしろ、どの程度、異なる世代に話者が分布しているかが重要である。話者が1万人いる言語も、わずか数名のものも、その話者達がすべて高齢者層に限られていれば同程度に危機度は高いと考えなくてはならない。すなわち、状況が変わらない限り、どちらの言語もこの10年から20年で消滅すると予想される。逆に言えば、若い世代、特に子供がその言語を母語として習得しているか否かが言語の危機度を考えるうえでもっとも重要になる(宮岡 1999)。その点、セイリッシュ語を流暢に話せる子供の存在を、この十数年調査にかかわってきたなかで筆者は聞いたことがない。

北アメリカ北西海岸地域で、さらに言語の危機度を高めているのは、ある年齢層を境に話せる能力が急激に低くなっていることである。これはかつて政府がおこなった寄宿学校制度にその原因があると考えられる。その制度のもとでは少数民族の子供は全寮制の学校に入れられ、母語を禁止され、英語を習得することを義務づけられた。そして母語をひとことでも口にすれば、厳しい体罰が与えられた。その結果、この寄宿学校に行かずに済んだ世代と、それを経験した世代の間には民族語の能力にかんしておおきな差がある。最高齢者層を一番うえにした、世代ごとのこの能力の減退がゆるやかな下降曲線を描く状況と比べ、その下降が激しければ激しいほど、民族語教育などによってその減退を修復するのは困難であろうと思われる。

白人によって禁止されたのは言語ばかりではない。先住民族固有の文化もさまざまな側面が各地で禁止された。そして、圧倒的な力をもつ白人社会のなかで、先住民族が成功しようと思えば—それは経済的に成功することを意味する—みずから、白人文化へと同化していかざるをえない背景があった。民族固有の文化が希薄になれば、その言語を習得する動機は見つけにくくなる。民族語は「何の役にも立たない」どころか、英語を習得するさまたげにさえなると考えられ、子供は「無駄な」努力をして習得しようとはせず、親は子供のためを思って英語だけを家庭で使うようになっていった。これらの問題にかんしては渡辺(1999)も参照されたい。

3 調査・記述の現状

セイリッシュ語について言えば、北アメリカの言語のなかでは、決してその研究が遅れている方ではない。むしろ、研究会(「セイリッシュ語と近隣諸語国際研究会(International Conference on Salish and Neighboring Languages)」)が1966年から毎年1回おこなわれていることから分かるように、かなり盛んに研究されている方だと考えられる。(ちなみに、この研究会は2日半にわたっておこなわれ、言語学の研究発表

のみならず、先住民自身による、民族語教育の報告もなされる。) にもかかわらず、例えば各言語についての辞書の出版状況をひとつの指標として考えると、セイリッシュ語族の23言語のうちで辞書が整備されていると言える言語は、その半数にもはるかに満たない。

このように調査・記述を遅らせている要因はいくつか考えられる。ことによると、それは北アメリカに特有のもの、もしくは少なくとも世界の他の地域に比べて、より顕著に見られる要因ではないかと考えられる。(北アメリカ以外ではオーストラリアの状況が似ていると思われる。)

まず、この地域で調査に入るためには、調査に先だって先住民のコミュニティから、正式な許可が必要ながある。ここで、北アメリカは世界の他の地域には例を見ない「訴訟大国」であることを想起しなくてはならない。つまり、「正式な」許可とは、「法的に有効な」許可を意味することが多い。極端な例としては、調査許可にかんして合意をえるまでに、先住民と言語学者の双方が弁護士を立てて数年にわたって交渉したケースすらある。

調査をおこなう許可とは別に、収集したデータの「著作権」を要求されることもある。すなわち、収集したデータを論文・学術書としてまとめる際に、その言語データを使用するための許可を先住民コミュニティからとる必要がある場合がある。当然、話者の写真を掲載するためには肖像権の問題を解決しなくてはいけないし、インターネット上で世界に向けて情報を公開するということはさらに大きな問題となろう。

これらの許可がえられるまでにかかなりの時間がかかり、結局許可がおりないこともありうる。さらに、まれにみる音声的複雑さをもって知られるこの地域の言語は、調査の初期段階にかかなりの時間がかかることも考えられ、限られた時間内で結果(すなわち論文)を出さなくてはならない場合——そして、それが学位論文の締切であれ、えられた助成金を使用できる期間であれ、多かれ少なかれ必ず時間は限られている——、調査を始めるにあたってリスクが高いということになる。

これらの状況が調査・記述の遅れのもうひとつの大きな原因を生む。それは、セイリッシュ語族の研究に携わる研究者の絶対数が少ないことである。本来ならば各言語(もしくは各言語のなかの各方言)に常時かわるフィールドワーカーが、少なくとも5名ずつはいなくてはいけないであろうし、20名や30名ずついてもおかしくないどころか、各言語の「危機度」を考えればそれでも足りないくらいにやるべき仕事は山ほどある。

4 言語教育の現状—ある言語の「復活」と言語の紋章的機能

言語学者と先住民は、消滅していく言語をただ手をこまねいて見ているだけではない。多くの先住民コミュニティで民族語を若い世代に教える試みがなされている。

そのような言語教育—あるいは「言語復興」—の成功には、それに携わる熱心な個人が絶対に必要不可欠である。そしてその個人とは、外部者である言語学者ではなく、当該民族出身の個人である必要がある。(ヘブライ語の復活に献身的な努力をしたベン・イェフダが想起される。)北アメリカのうち、少なくとも北西海岸の先住民コミュニティは、通常、数百人から数千人規模で形成される小規模のものであるため、1個人が及ぼしうる影響が大きい。最近、あるコミュニティで言語の「復活」に近いことが起こったとの報告があったが、これも基本的に1個人の努力が影響を及ぼした結果のようである。この言語とはセイリッシュ語族のうち、北ストレイツ語 (Northern Straits) のランミ方言 (Lummi) のことである (Montler 1999)。

ただし、この言語に起きた「復活」がどの程度のものなのかが問題である。実際に報告されているのは、ある程度の会話能力も含まれてはいるが、おもに、伝統的行事や異なる民族との集会などで使われる場合で、スピーチや物語を語ることだとされている。

これはまさに紋章的 (emblematic) な機能としての言語である。そしてこの機能における言語こそ、「北アメリカ北西海岸先住民コミュニティでもっとも必要とされているものであり…この機能に焦点を当てた言語復活への努力がもっとも成功している」 (Montler 1999)。

言語の紋章的機能とは、一言語がひとつの社会をまとめる機能であり、同時に他の言語を話す集団からみずからを異化する機能である。この機能が重視されればされるほど、異化することに重点がおかれ、その結果、まわりの言語 (ランミ語の場合は特に英語) から異なってさえいけばよいということになる。すなわちそれは、伝統的な発音や文法に必ずしも忠実であるということを意味しない。

実際に「復活」した「新しいランミ語」には、伝統的なランミ語に比べ、顕著な違いがみられる。例えば、子音連続の単純化、声門化の部分的消失、声門閉鎖音の消失があげられるし、個々の子音の発音では q が k へ、χ が h, k, x へ、そして x^w が hw, kw へと変化している (Montler 1999)。これらの変化で注目したいのは、失われた発音のどれもがセイリッシュ語 (さらには北アメリカ北西海岸領域の言語) に特徴的なものである点である。すなわち、新ランミ語は「セイリッシュ語らしさ」は失っていても、紋章的機能を果たすには充分英語から異なっているということであろう。

5 研究者数の現状

危機言語の調査・研究にたずさわる研究者数は、世界のどの地域でも不足していると思われるが、北アメリカでもそれは例外ではない。その点、セイリッシュ語は比較的、研究者数が多い方ではあろうが、それでもその数は、すでに述べたように、充分というにはほど遠い。

異なる世代の話者による危機言語自体の継承と同様に、その研究が異なる世代の研究者によって継承されることが重要である。危機言語の調査・研究がひとりの高齢の研究者によってなされている状態では、どれほど研究成果があろうと、その研究自体が消滅の危機に瀕していると言えるのではなからうか。そこで、危機言語に取り組む若手研究者の育成が必要となる。

しかし、危機度の高い言語が多い北アメリカの先住民諸語の研究を始めるのは、若い研究者にとってハードルが高いものとなりがちである。調査を開始する際に必要なことがある「許可」についてはすでに触れたとおりであるし、調査費用の調達や、研究職への就職の問題などについてここでは触れないが、それ以外にも、危機度が高いからこそ生じるさまざまな問題がある。

例えば、研究者が、なんらかの理由から（たいてい最初は特定の言語学的現象への関心だと思われるが）調査・研究したいと思う言語を「選べる」とは限らない。現地の政治・社会的状況、現地までの交通のアクセス、現地で受け入れられるか否かといった要因が考えられるし、それを「選べた」としても、先行研究の質・量によってはその選択が言語学への、そして社会への貢献となるかは別の問題である。当然、先行研究が少なければ少ないほど調査・研究の重要性と貢献は高い。ただしそれは、すでに文法と辞書が揃った言語を研究するのとは違い、ある程度の成果をあげるのに時間がかかることも意味する。例えば、先にも触れたようにセイリッシュ語を含む北アメリカ北西海岸の言語は音声的に複雑で、通常ある程度聞き取れるようになるまでに時間がかかる。時間がかかるということは、いろいろな意味で「お金がかかる」ということも意味するし、論文（修士・博士）の提出期限がある大学院生にとっては、そのような言語を取り上げることはそれだけリスクが高いということになる。

さらに、危機度が高い言語を調査するということは、ほとんどの場合（すなわち対象言語が「復活」しない限り）、その言語の最期を看取るということの意味する。それは、時間をかけて信頼関係を築いていったかけがえのない話者が次々と亡くなるのを経験することであり、同時にひとつの文化が消滅していくのを目の当たりにすることでもあり、精神的負担を強いられる覚悟が必要であろう。

それでもあえて言うならば、「記述的研究」は当地アメリカ合衆国・カナダの若手研究

者（大学院生）よりも、日本を含むそれ以外の国の研究者によってなせるのかも知れない。北アメリカの大学のほぼすべての言語学科では、学生に最新の音韻・シンタックス理論を勉強し、その枠組みを使って論文を書くことを義務づけている。そこでは理論への貢献が問われており、1言語の文法全体を記述しようという研究は、学位論文としては認められにくいのが現状のようである。さらに、そのような理論的研究業績がないと、研究職への就職もむづかしいようでもある。

もちろん、理論的な研究と記述的な研究は、互いを支え合うものであろうし、双方のバランスがとれた状態が言語学としては健全な状態であろう。言語理論の発展にはさまざまなタイプの言語の文法記述が不可欠であるし、理論の発展は、以前にはそれを調べることを思いつかなかった現象にもフィールドワーカーの目を向けさせることになる。しかし、ここで私たちはやはりこれらの言語の「危機度」を今一度考えなければならないだろう。それは時間との競争である。北アメリカの多くの言語にとって、現状に劇的な変化がない限り、話者と直接調査ができるのはこの先10年くらいだと思われる。特に北アメリカで見られる理論研究へ偏りがちなバランスを、少なくともここしばらくは、むしろ記述的な調査・研究へと意識的に偏らせるべきなのではないかとさえ思われる。

6 おわりに

本稿では北アメリカの先住民諸語、特に北西海岸のセイリッシュ語を中心にその現状と課題を概観した。調査をする「法的許可」の問題など、世界の他の地域ではあまり見られないと思われる問題にも触れたが、本稿で述べたことは北アメリカ以外の地域で話されている危機言語にかんしても当てはまる点があるだろう。

最後に筆者の経験を紹介することで本稿を締めくくりたい。上述したセイリッシュ語研究会で、ある研究者が言語の危機度にかんして、「我々の前に今あるのは、非常事態である」と発言したことがある。そして、ある他の研究者には、筆者が初めての現地調査を終えてから帰国する前に、お世話になった礼を言うと、「礼はいらない。ただ、また（調査に）戻ってきなさい」と言われた。継続して調査をすることこそが一番むづかしく、それゆえか、継続して調査をする研究者が非常に少ないことを当時の筆者はまだ理解していなかった。あらためて考えると、このふたりの言葉が少なくともセイリッシュ語にかんする現状と課題を言い表していたと思われる。

別表 セイリッシュ語族の言語とその話者数

セイリッシュ語族 Salish	
語派・言語名	話者数 ¹⁾
I. (1) ベラ・クーラ語 Bella Coola	200人以下
II. 海岸語派 Coast ²⁾	
(2) コモックス語 Comox	400人以下
(3) ベントラッチ語 Pentlatch	死語
(4) シーシェルト語 Sechelt	およそ40人
(5) スクワミッシュ語 Squamish	およそ20人
(6) ハルコメレム語 Halkomelem	500人
(7) 北ストレイツ語 Northern Straits	20人以下
(8) クラーラム語 Klallam	5人
(9) ヌックサック語 Nooksack	死語
(10) ルシュツィード語 Lushootseed	10人以下
(11) トゥワナ語 Twana	死語
III. ツァモス語派 Tsamosan	
(12) クイナルト語 Quinault	6人以下
(13) 下チヘリス語 Lower Chehalis	3人以下
(14) 上チヘリス語 Upper Chehalis	2人?
(15) カウリツツ語 Cowlitz	1人?
IV. (16) ティラムーク語 Tillamook	死語
V. 内陸語派 Interior	
(17) リリエット語 Lillooet	400人以下
(18) トンプソン語 Thompson	500人以下
(19) シュスワプ語 Shuswap	500人?
(20) コルビル・オカナガン語 Colville-Okanagan	500人?
(21) コロンビア語 Columbian	40人
(22) スポカン・カリスベル・フラットヘッド語 Spokane-Kalispel-Flathead	165人
(23) コル・ダレーン語 Coeur d'Alene	2人

1) 話者数の出典は、Czaykowska-Higgins, and Kinkade “Salish Languages and Linguistics.” In Ewa Czaykowska-Higgins, and M. Dale Kinkade (eds.), 1998, *Salish languages and Linguistics: Theoretical and descriptive perspectives*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter. pp. 64-68.

2) 中央語派 Central とも呼ばれる。

文 献

Mithun, Marianne

1999 *The languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.

宮岡伯人

1999 「危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム」『月刊言語』28 (1), 110-117。

Montler, Timothy

1999 Language and dialect variation in Straits Salishan. *Anthropological Linguistics* 41 (4), 462-502.

渡辺 己

1999 「抑圧と同化のなかで消えてゆく北米インディアン諸語」『月刊言語』28 (4), 98-105。

